

短編ドキュメンタリー映画企画書

【タイトル】

『日中友好の絆 ～医学に国境はない～』（仮題）

【概要】

三十数年前、中国烟台市の病院に10台の透析機器を寄贈した宮古市にある後藤皮膚科泌尿器科医院の後藤康文院長。「医学に国境はない」という信念の元、その後も機器の寄贈を続けるだけでなく、烟台から宮古まで医師や看護師を研修に招き、院長自ら新たな技術と情報を持って烟台を訪れ中国の透析医療の発展に貢献してきた。その活動は両国の行政にも広がり、1993年、宮古市と烟台市は日中友好都市の議定書を交わし、経済・文化・教育など各分野でも広く交流を持つようになる。

2024年5月、烟台の病院から医師団が十数度目となる来日を果たし、後藤医院を始め岩手県の主要な透析病院を視察した。今回は後藤院長の米寿の祝いも兼ねての訪問だったが、直前になって院長の体調が悪化し入院したことが告げられる。病床を見舞うことはできたものの、医師団は主役不在の祝賀に参加することとなった。

90年代初頭、最初の交流が始まって以来後藤医院での研修に参加し、院長に信頼を寄せてきた高惜春前看護師長やゆかりのある方々の証言を元に、後藤康文院長が続けてきた患者の命を救うための努力と交流の歴史を追った短編ドキュメンタリー。

【企画意図】

この作品は岩手県宮古市で後藤皮膚科泌尿器科医院を営む後藤康文医師が、30年以上前から行ってきた中国烟台業達医院との交流を描くことで、両医院の日中友好の絆を後世に繋げるとともに、宮古市と烟台市の友好都市としての歴史を記録に残すことを目的としています。

90年代初頭の中国では、血液透析医療における機器の導入及び技術的改革は皆無に近く、後藤医師は多くの患者が苦しみ命を落としている惨憺たる状況を知り、自費を持って透析医療機器を現地に送り技術的指導を行うことを始めていました。この行いは今なお続けられており、中国透析医療の発展に寄与し現在まで宮古市日中友好協会会長、宮古市国際交流協会会長として現業の医師としての勤めを行いながら日中友好の架け橋となって尽力されています。

こうした30年以上にわたる中国医療への献身的貢献は、多くの中国人に深い感銘を与え今なお感謝されています。また、後藤院長は2022年日本医学功労賞に選出され、天皇皇后両陛下に接見し、慰労のお言葉を頂戴しています。

このように、地域医療に尽力しながら、国境を超えた医療の発展と経済・文化・教育の交流に貢献してこられた後藤康文院長の活動が、後に続く人々にどのような影響を与えているのかに焦点を当てたドキュメンタリー映画を目指します。(瀬川)

《プロデューサー》 瀬川徹夫・稲葉正

《監督》 水元泰嗣

《撮影》 瀬川 龍